人権ほっと28年6月号

『『正しさ』からの偏見」

大阪教育大学教授
堀　薫夫

アガサ・クリスティが、メアリ・ウェストマコット名で描いた『春にして君を離れ』。主人公は一般的な主婦で、夫は有能な弁護士、３人の子どもも立派な大人となり幸福な生活を送っていた。一方、旅先で出会ったかつてのアイドルだった同級生はすさんだ姿と化していた。旅先からの帰国時に列車が大雨で止まり、一週間近く砂漠内の宿泊所で何もすることなく過ごす。そこで想起されてくる数々の回想が、「正しくて」「すぐれた」主婦である自身の存立基盤を揺るがしていく。

本書の終盤部分で、列車内でロシアの婦人に出会いドイツとの戦争が予言される。主人公はそれを信じず「ナチズムだって良いところもある」と言ってしまう。そうナチズムは、本書へのある評者の言を借りるならば、「心身共に美しく健全で、有能で、勤勉で、おのれの義務に忠実で、愛情と自負に満ちた」主人公のような人たちによってささえられていたのだ。自分（たち）は優秀で高潔だ、それにくらべて「あいつら」はどうだ…まさにこうした「有能」で「正しい」がゆえに生じる偏見と向き合わねばならないのだ。だらしない退廃的な生活を送る人を指弾することはたやすいだろう。しかし本書主人公のような「正しく」「まじめで」「有能な」人を批判することはむずかしい。だがそこには「正しい」からこその人権侵害の温床も潜んでいるのだ。

「正義の味方症候群」ということばがある。「正しい」生き方に憧れることをさすのだが、その一方で、それと異なる生き方をする人への非難や攻撃が伴うこともある。「自分たちはすぐれた民族」「自分の住む地域は民度が高い」…こうした自負と自尊心は、「そうでない」と思う人びとへの蔑みのまなざしにつながりかねないのだ。